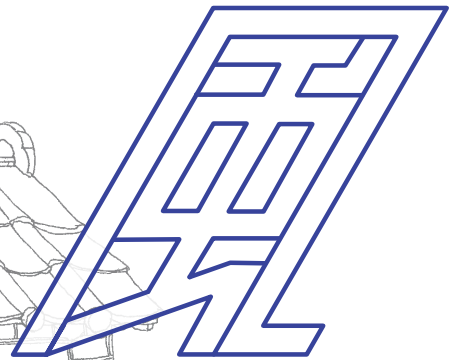
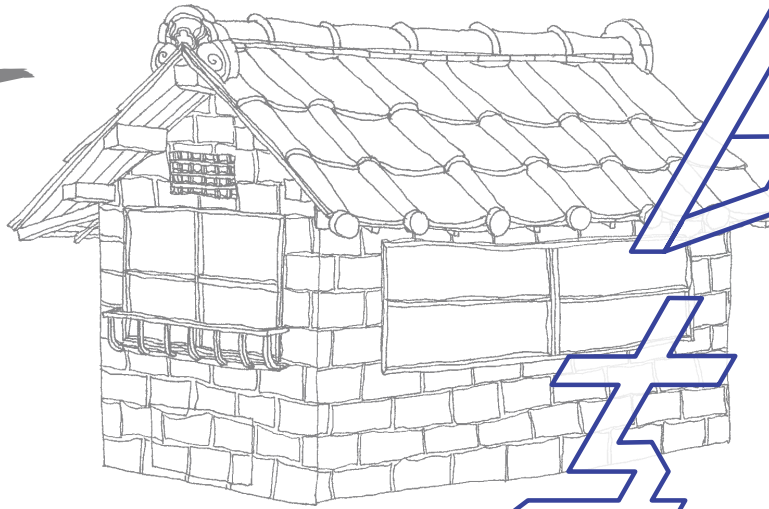
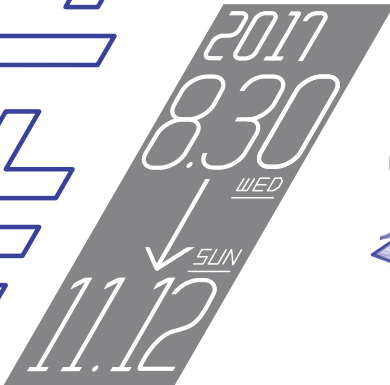
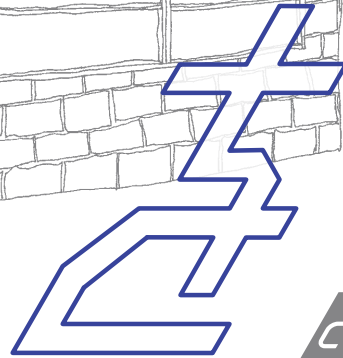


Satoshi Murakami

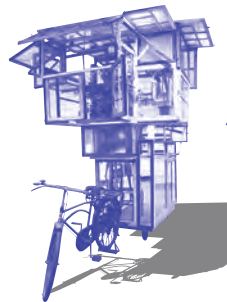
家を
せ
お
っ
て
歩
く
?



GⅢ vol. 118



Kyohei Sakaguchi



建
て
な
い
建
築
家
?

村上慧
牛嶋均
坂口恭平
の實踐

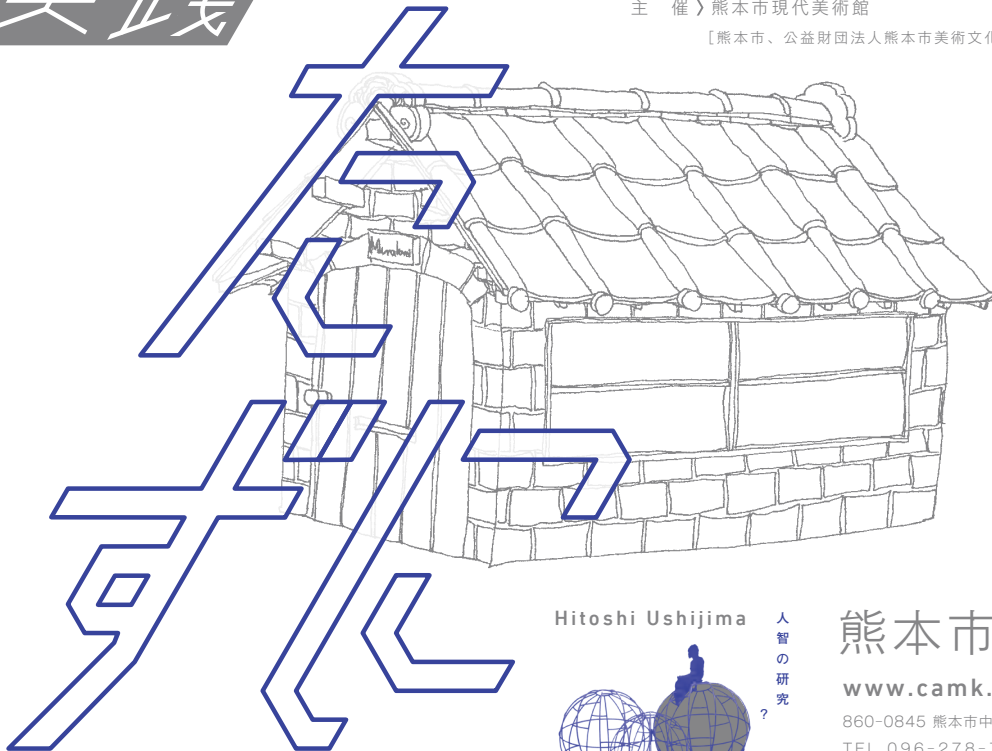
開館時間 > 10:00-20:00 火曜休館

会 場 > 熊本市現代美術館

ギャラリーⅢ+井手宣通記念ギャラリー

主 催 > 熊本市現代美術館

[熊本市、公益財団法人熊本市美術文化振興財団]



EXHIBITION

入 場 無 料

Hitoshi Ushijima

人
智
の
研
究
?



熊本市現代美術館

www.camk.or.jp

CAMK

860-0845 熊本市中央区上通町 2-3 びふれす熊日会館 3 階

TEL 096-278-7500 FAX 096-359-7892

熊本市現代美術館では、コレクションや九州に関わりのある作家や活動を紹介する小企画シリーズ GⅢ vol.118として「風を待たずに——村上慧、牛嶋均、坂口恭平の実践」を開催します。

村上慧は2014年より発泡スチロールで自作した家をせおって歩く《移住を生活する》を始めました。村上は、移動で訪れた場所にある民家をベンで描き、歩きながら感じたり考えたりしたことをブログに綴っています。家をせおって移動しているその姿は、まるで家が立ち上がり、歩き出したかのように見えますが、それは土地という固定されたシステムから家を切り離し、私たちが生きる現場へ歩いて近づこうとする行為といえるかもしれません。

福岡県久留米市で家業の遊具製造業を継ぎながら制作を行う牛嶋均は、廃棄された遊具を回収し、鉄として完全にリサイクルされる前に、新たな造形の可能性を提示してみせます。遊具の変わらな

いシンプルな原型の組み合わせは、牛嶋自身による作品の制作／探求であると同時に、鑑賞者にも知的な創造を誘発します。抽象化された遊具は、周囲の景色とともに、私たちの社会で常に揺れ動く目に見えない境界や関係性も自ずと生み出します。

当館コレクションからは、2009年の個展 GⅢ vol.67「坂口恭平 熊本0円ハウス」で公開制作された《坂口自邸》を展示します。台車と自転車を取り付けられている本作は、いつでもどこへでも自力で移動可能なモバイルハウスです。開放的なガラス窓で構成された内部空間には、植物（人工植物）が生自しています。水平にも垂直にも自由自在な《坂口自邸》は、変化し続ける家主とともにある家の姿が表れているようです。

本展では、私たちが生きる状況について思考し続けている3人の作家の実践を紹介します。（池澤茉莉）

関連イベント | [ナイトトーク] 村上慧と牛嶋均 本展出品者の二人が、リラックスした空気の中で会話をします。
日時：9月1日(金) 18:00 - 19:30 会場：熊本市現代美術館 ホームギャラリー

村上 慧 Satoshi Murakami

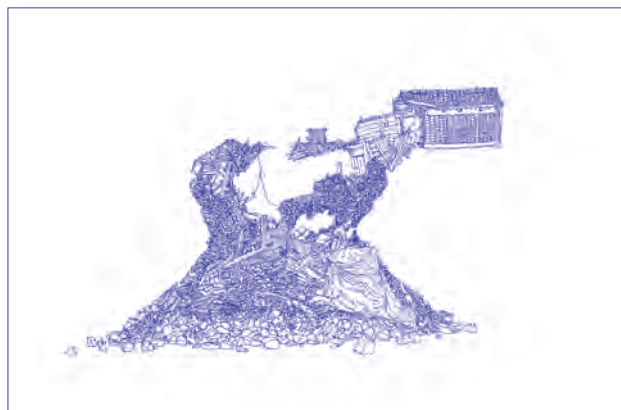
satoshimurakami.net

1988年東京都生まれ。2011年、武蔵野美術大学造形学部建築学科卒業。2014年より自作した家をせおって歩く《移住を生活する》を始める。著書に『家をせおって歩く』（「たくさんのふしぎ」327号、福音館書店）、『家をせおって歩いた』（夕書房、2017）がある。主な個展に「移住を生活する1～182」（Gallery Barco[東京]、2015）、「家の提出」（awai art center[長野]、2016）。主なグループ展に、「瀬戸内国際芸術祭2016」、「OpenART 2017」（スウェーデン）など。2017年、文化庁新進芸術家海外研修制度にてオレブロ滞在。



もっと根源的に、この定住と貯蓄を前提としたこれまでの僕自身の生活を対象化し、日々の生活のために日常をこなしていたような、あの閉じきった生活からの脱出を試みるのだ。——村上慧《移住を生活する》2014年4月7日

©Takahiro Ichikawa



熊本県熊本市中央区本丸 2016年11月29日 作家蔵



(Dream on the Boat (barge)) 2015 作家蔵 ときわ湖水ホール(宇都)での展示風景 © Michihiro Ota

牛嶋 均 Hitoshi Ushijima

1963年福岡県浮羽郡（現・久留米市）生まれ、拠点。1983年、九州造形短期大学グラフィックデザイン科卒業。1985年に舞踏家・田中浜が主宰する「舞塾」に参加、パフォーマンスを始める。ヨーロッパ、アメリカなどでパフォーマーとして活動後、帰国。家業の遊具製造業を営みながら、国際展、グループ展への参加や、ワークショップなどを行う。主なパブリックコレクションに《キリシマのキチ》（2000、鹿児島県霧島アートの森）、《人智の研究 ver. 2—キチ+リヤカー》（2002、福岡アジア美術館）、《ころがるさきの玉 ころがる玉のさき》（2008、金沢21世紀美術館）など。

遊具も美術も、ないならいい。子どもたちは何かあれば何でも遊び物にしてしまう。勝手に遊んでしまうけれど、そこにそのための専用のものをわざとつくる。それが遊具と美術の近いところ。——牛嶋均「カラダに効くアート 牛嶋均」(インタビュー-映像)



©FFAC



《坂口自邸》2009 熊本市現代美術館蔵

坂口恭平 Kyohei Sakaguchi

Oyehouse.com

1978年熊本市生まれ、拠点。2001年、早稲田大学理工学部建築学科卒業。2004年、東京の路上生活者の家を取材した写真集「0円ハウス」（リトルモア）を出版。2011年には郷里・熊本市に移住し、個人による公共スペース「ゼロセンター」を開設した（～2014）。2017年8月、熊本市内のオモキビル跡地に「モバイルハウス計画」を1ヶ月限定で実施。建築に関する様々なプロジェクトを実行するだけでなく、小説やドローイングの発表など幅広く精力的に活動している。主な著書に『現実脱出論』（講談社新書、2014）、『しみ』（毎日新聞出版、2017）など。



住人自らが作った家というものは、絶えず運動と変化を繰り返し、秩序とずれが同居している。輪郭は常にゆらゆらと揺れ、しかもそれが調和を生み出している。その姿は建築物という3次元の世界を軽く飛び越えていく。——坂口恭平「0円ハウス」

2017年
8月30日(水) - 11月12日(日)
「火曜日休館」

入場無料

熊本市現代美術館

CAMK